日本神話の星と宇宙観（2）

勝　俣　　隆
〈長崎大学教育学部　〒852 長崎市文教町 1-14〉

天の八衢と猨田毘古神

今回は，古事記や日本書紀に現われる天地を結ぶ通路である天の八衢（あめのやちまた）と，そこに居て光を投げかけ太陽神の先導を行う猨田毘古神（さるたびこのかみ）について，考察してみたい．まず，古事記の天孫降臨（てんそんこうりん）の段には次のような描写が見られる．

> 爾（ここ）に日子番能爾爾芸命（ひこほのにぎのみこと），天降りまさむとする時に，天の八衢（あめのやちまた）に居て，上は高天原（たかまのはら）を光（てら）し，下は葦原中国（あしはらのなかつくに）を光す神，是に有り．故爾に天照大御神（あまてらすおほみかみ），高木神（たかぎのかみ）の命（みこと）以ちて，天宇受売神（あめのうずめのかみ）に詔（の）りたまひしく，……「汝往きて問はむは，『吾が御子の天降り為る道を，誰ぞ如此（かく）て居る．』ととへ」……故問ひ賜ふ時に，答へ白ししく，「僕は国つ神，名は猨田毘古神（さるたびこのかみ）ぞ．出で居る所以（ゆゑ）は，天つ神の御子天降り坐（ま）すと聞きつる故に，御前（みさき）に仕（つか）へ奉（まつ）らむとして，参向（まいむか）へ侍（さもら）ふぞ」とまをしき．

この記事では，「吾が御子の天降り為る道」即ち天照大御神の孫にあたる番能爾爾芸命（ほのににぎのみこと）が天降ろうとする，その道に「上は高天原を光し，下は葦原中国を光す神」が居て，天宇受売神により，その神の名が猨田毘古神（さるたびこのかみ）であることが明らかにされる．「吾が御子の天降り為る道」（私の御子が，天からお下りになる道）は，前回（1）で述べた古代日本人の宇宙観に拠れば，天の層に開いた穴，即ち，星で出来た通路である可能性が高かろう．

その通路の名は，天の八衢（あめのやちまた）であった．天の八衢のうち，「衢」は，類聚名義抄にも，「チマタ」の訓みが見られるように，道の分かれ目である．古事記の伊邪那岐命の禊ぎ祓えの場面にも見られるように，「道俣神（ちまたのかみ）」の「道俣」とは，「道（ち）」の「俣＝股（また）」，即ち，道が人体の股のように分岐した部分である．八衢の「八」は数字の「八」そのものであるとともに数が多いことを表わす表現でもある．それ故，「天の八衢」とは，「天にあって，八方に通じている分かれ道」，あるいは，「天にあって，分かれ道が多数集まっているところ」の意となろう．ところで，先にも述べた通り，天に開いた穴は，天地を繋ぐ通路であり，その穴は，古代日本人においても，星として認識されていた可能性が高い．その場合，天に分かれ道が多数集まっていることは，天の層の一角に通路としての星が多数集まっている状態を指すことになろう．天空上で具体的に該当する星の集団を指摘すれば，何が適当であろうか．肉眼で見える星団としては，昴やプレセペ星団があるが，多数の星が一か所に集まっているのが肉眼で明確に確認され，かつ，方言を含む名称・形態・伝承・民俗等が多数残っている点から判断して，最も相応しいのは，星団のすばる（昴・プレアデス星団）であろう．(注1)

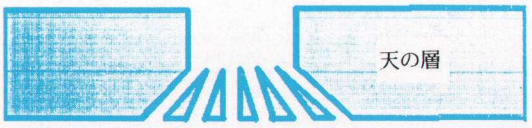
すばるは，群がり星（全国）・あつまりぼし（静岡）・鈴生り星（静岡・広島）・ゴチャゴチャ星（舞鶴・姫路）・六連星（東日本）・ムリカブシ・プレプシ（沖縄・奄美）等の一か所に集合した様子を方言として持ち，「すばる」自体が，「統る（すば

る)」の意で，星の集合を表わした名称である．文献上も，風土記・日本書紀等上代からその用例が見え，枕草子でも，清少納言が「星はすばる．」と，星々の中で筆頭に挙げたように，日本人には，古くから親しみの深い星団である．古代日本人が，すばるの様子を見て，そこに天地を結ぶ通路が多数開いていると判断したことは十分に考えられるところであろう．

その場合，何故，「天の八衢」というように，多数の通路の存在を考えたのであろうか．例えば，昴の集まり全体を，一つの大きな通路と見なすことも可能であったろうに，何故，星の一つ一つを通路と考えたのか．

一つの可能性として，「八衢」というのだからその「八」に注目した場合，「八」は文字通り，「八方」即ち「東西南北とその間の四方向」を表わし，昴の一つ一つの穴が，それぞれの方位に向いて開いていて，東なら東に行く時は，東に向いた分かれ道を通らないと目的地に行けないという考えがあったのかも知れない．それ故，その場合の天の八衢の図は，図1のようになろう．

天上世界（高天原）



天の八衢（昴）の模式図

地上世界（葦原中国）↓

図1

さて，天の八衢が「昴」に比定されるならば，天の八衢に居るとされる猨田毘古神は，どのように理解すべきであろうか．

猨田毘古神については，日本書紀に詳しい描写が見られる．

> 一の神有りて，天八達之衢（あめのやちまた）に居り．其の鼻の長さ七咫（あた），背の長さ七尺（さか）余り．……且（また）口尻（くちわき）明（あか）り耀（て）れり．眼は八咫鏡（やたのかがみ）の如くして，赤色然（てりかがやけること）赤酸漿（あかかがち）に似れり．……吾が名は是，猨田彦大神．

これは，天八達之衢（あめのやちまた）に居て，鼻の長さが七咫（105～158 cm）と長く，身長も七尺余り（131～198 cm）あり，口の両端が明るく光り，眼が八咫鏡のように丸く大きく，その眼の色が赤く輝くことは，あかかがち＝（酸漿，ホオズキの古名）に似ているという猨田彦大神の容貌の描写である[注2]．日本神話の神々の中で，顔かたちの描写が，数値を含んで，是ほど詳しく記述された神は，他には見いだせない．

このことは，この神が，空想の産物ではなく，具体的なイメージを以て描かれたことを推測させよう．猨田毘古神（日本書紀は猨田彦大神．以下古事記の表記で代表する．）という名称も，古事記・日本書紀の表記から判断して，「猨」は文字通り「猨（猿の正字）」である可能性が高い．特に，この神が，「天の八衢（あめのやちまた）に居て，上は高天原（たかまのはら）を光（てら）し，下は葦原中国（あしはらのなかつくに）を光す神」として描かれている点が注目される．つまり，天の八衢を昴と考えれば，昴の所で天地に光を投げかけている猨田毘古神という存在とは，昴の極く近くに位置し，赤い眼や長い鼻，両端が光った口をして，身体全体が光り輝く存在，つまり，昴が冬の夜輝く星団であることからすれば，猨田毘古神も，昴と同じレベルにおいて，冬の夜輝く，猿の姿をした星座と考えうるのでなかろうかと思われるからである．

この仮定に立つ時，猨田毘古神は，具体的に如何なる星座として復元できるであろうか．

先ず注目すべきは，猨田毘古神の眼である．「八咫鏡のように円く，赤く輝くことが，真っ赤な酸漿（ほおずき）に似ている」と描写された眼は何に比定できるだろうか．酸漿のように円く赤い存

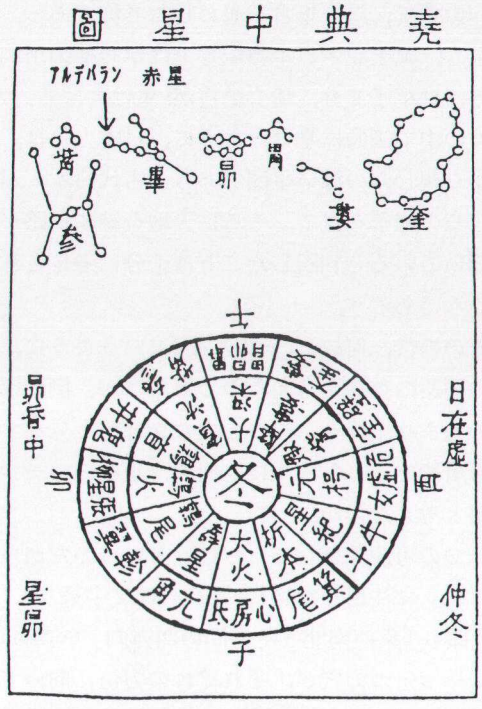
在と言えば，天の八衢である昴の近くに位置する円く赤い大きな星が候補として挙げられよう．星を動物の眼と見なすことは，洋の東西を通じて行われてきたことである．西洋の星では，牡牛座・ペガサス座・魚座・一角獣座・海蛇座・烏座等の眼は，星で表わされている．日本でも，双子座の$\alpha\beta$，蠍座の$\lambda\upsilon$，小熊座$\beta\gamma$等が，蟹・猫・犬・鰈等の眼とされている．そこで，猨田毘古神の眼として相応しい赤い星を探すことにする．

肉眼で良く目に付く一等星以上の赤色巨星や赤い惑星は，次の通りである．

ア，アルデバラン（牡牛座）
イ，ベテルギュース（オリオン座）
ウ，アンタレス（蠍座）
エ，アルクトゥールス（牛飼座）
オ，火星

このうち，アンタレスやアルクトゥールスは，夏や春の星で，天の八衢に比定される昴が冬の象徴的星であることからすれば，季節的に無理があると思われる．また，火星は惑星として，常に天空上の位置を変えているから，星座には成りにくいと考えられる．残りのアルデバランとベテルギュースは，冬の星であり，昴とも近い位置にあるので，どちらも候補には成りうる．しかし，昴に対してより近い位置にあり，「すばるの後星」という方言を持つアルデバランの方が，その関係の密接さからして，より相応しいであろう．そもそもアルデバランという名称自体が，アラビア語で「(昴の) 後に昇るもの」という意味だと言われている．このアルデバランは，日本の方言では，「赤星」とも言われ，赤い星として認識されてきたし，牡牛座の眼がこのアルデバランであるから，動物の眼として見るのも自然な星である．そこで，古星図で，昴（天の八衢）とアルデバラン（猨田毘古神の眼）の位置関係を示すと，次のようになる．

猨田毘古神の眼が決まれば，それを基に，他の部分を復元できるであろう．そこで，次に猨田毘古神の顔の輪郭と鼻について考察してみる．



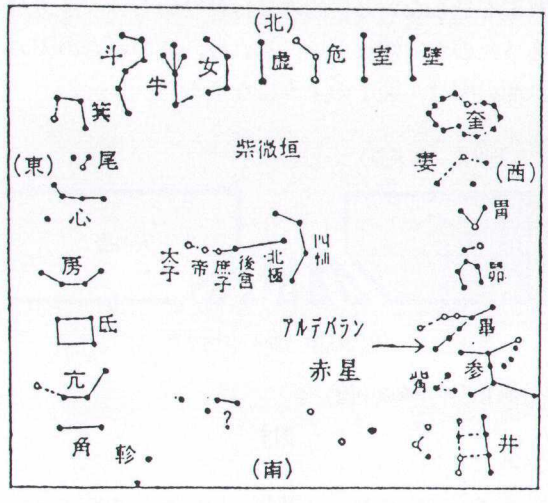


図2

アルデバランを含む星団はヒアデス星団と呼ばれ，中国では畢星という呼称を古くから持ってきた．畢星とは，『説文解字』という中国の古い字典に対する注(段玉裁)の中で，「網小にして柄長き，之を畢と謂ふ．」と説明されており，柄の長い小さ

な網の名称であることが分かる．面白いことに，イタリアでは，ラケットに，アラビアでは三角匙に，中世のカスティーリア王国では松明の火と考えていたのであり，長い柄の付いた丸や三角の形を想像した点で共通している．これは，ヒアデスがＹ字型をしているために発生した見方であって，日本の方言では，文字通り，Ｙ字型そのものの形を取って，「三股（さんまた・ざまた）」という方言が見られる．また，日本の方言で「箕星」「釣鐘星」「扇星」という名称があるのは，Ｙ字型のＶの部分を，「箕」「釣鐘」「扇」に見立てたもので，中でも，ウマノチラー（馬の面，沖縄）・うまのつらぼし（馬の面星・山形）と動物の顔に見立てたものがある点が注目される．猨田毘古神の顔も，基本的には，この馬の面に相当するのではないかと推測されるからである．同時に，ヒアデス星団をＹ字型に見なす見方も普遍的に存在することを考慮すれば，Ｙ字型のＩの部分が猨田毘古神の鼻に相当するのではないかという予想が立てられよう．

そこで，「鼻の長さ七咫」とされる猨田毘古神の鼻の長さが天空上の視覚的長さでは，どの位になるのか検討してみたい．上述したように，日本の神話の中で，神様の鼻の長さがどれくらいかというような点について言及した描写は，他には全く無いと言って良いので，この「鼻の長さ七咫」という具体的描写は極めて特異であり，猨田毘古神が星座であれば，星座としての視覚的長さを表わしている可能性が高いからである．

『説文解字』では，「尺は十寸也」とした後で「咫中婦人の手長は八寸にして，之を咫と謂ふ」と説明している．即ち，「咫」は「尺」の0.8倍の長さであることになる．

渡辺敏夫氏は，「古記録の凌犯について」という論文の中で，尺を度数に換算する方法を次のように述べておられる[1]．

> 大体に於いて一尺が一度に相当しておることが判るが，なお，詳しく言えば，一尺以下では一尺は一度に相当しておるが，一尺以上では，一尺一度の割に半度加えたものになっておる．

渡辺氏の換算に拠れば，七咫は，七尺の0.8倍で五尺六寸だから，一尺以上の場合に相当し，「一尺一度の割に半度加えたもの」即ち，一尺が1.5度となるから，五尺六寸は，8.4度の長さ（角度）になる．そこで，天空上で，実際に8.4度の角度を取ってみると，猨田毘古神の鼻の始まりと思われるアルデバランの辺りを起点として，ヒアデス星団のＹ字型の先端λの位置へほぼ達することになる．（図3を参照のこと．）

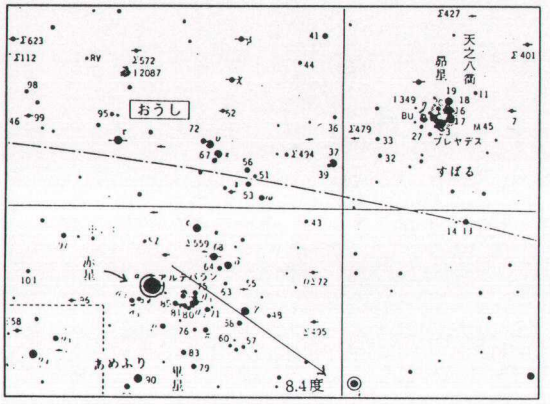


図3

そこで上記の部分を猨田毘古神の鼻と見なすと猨田毘古神の口は，次の図4のように推測される．

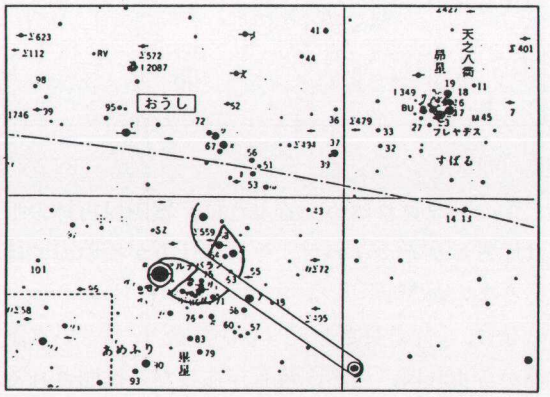


図4

すると，図らずも，口の両端には，星が集まって光っており，「口尻（くちわき）明（あか）り耀（て）れり．」つまり，「口の両端が明るく光っている．」という日本書紀の猨田毘古神の記述とまさに一致する．

そこで，先の「うまのつらぼし（馬の面星）」と言った方言も参考にして，猨田毘古神の輪郭を復元すると，最終的には，次の図5・6のような猨田毘古神の図が復元できる．

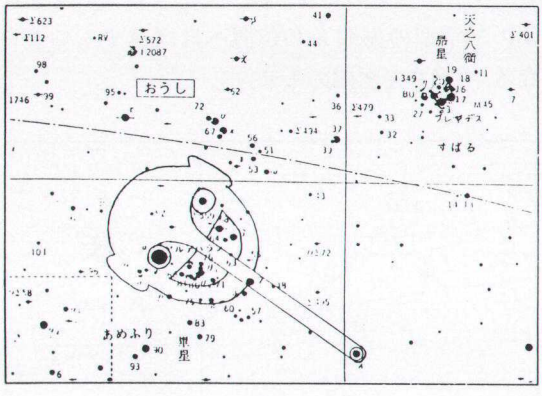


図5

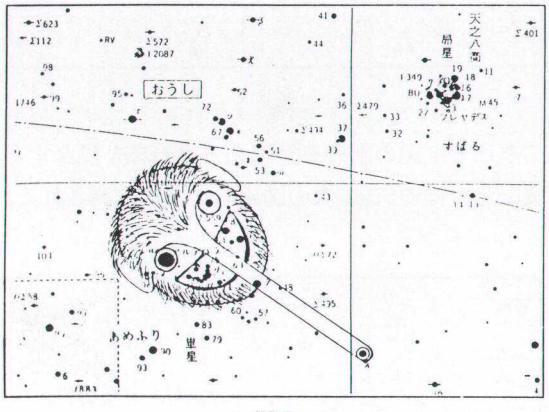


図6

この図を見ればわかるように，猨田毘古神の眼は片方しか赤くないが，それは仕方がないのではあるまいか(注3)．

なお，「背の長さ七尺（さか）余り．」という記述からすれば，当然，背も存在したと推測されるが，現在までのところ，明確な復元はできていない．「七尺余り」という長さは，「鼻の長さ七咫」の1.25倍以上であるから，「背の長さ」いわゆる「身長」は，鼻の長さの1.25倍以上あったことになるが，どの方向に胴体が伸びているのか確実な証拠がない．「天の八衢に居て」ということから，昴の近くに胴体が伸びていた可能性もあるが，胴体に関しては長さだけで，具体的な描写がないので，細部の形態がわからず，これ以上詳しい復元は，現時点では難しいと思われる[2]．

なお，中国では，この昴の近くに「天街」や「天関」という名の星を古くから考えて来た．これを大崎正次氏の図を借りて，示せば，次のようである[3]．

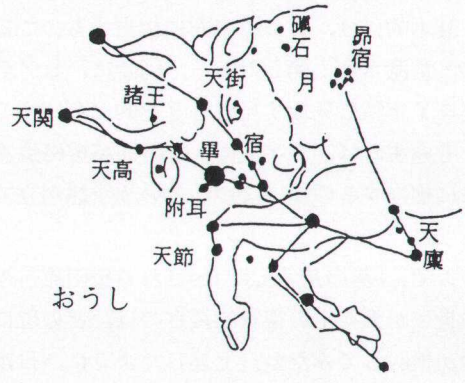


図7

特に「天街（てんがい）」は，後漢司馬遷の史記天官書（しきてんかんしょ）に「昴畢の間を天街と為す」とあり，三国時代の魏の学者孫炎（そんえん）は，その注として，「昴畢の間，日月五星出入の要道」としている．大崎氏の言葉を借りれば，「天界の中にあるメインストリート．昴と畢の間にある黄道にあたり，太陽，月，惑星の通り道である．」ということになる．「天街」の「街」の意味は，説文解字に，「街は，四通の道也．」とあり，一方，「衢」は，「衢は，四達，之を衢といい謂ふ．」とあり，どちらも，「四方に通じている道」ということで，意味は近い．それ故，「天の八衢」が中国文化の影響下で成立した観念であれば，中国語の

「天街」を日本風に言い換えたものが「天の八衢」である可能性もある．しかし，図7に示すように，「天街」は，星としては，肉眼では確認するのが難しい小さな星(通常 χ^2Tau 5.28 等，υ'Tau 4.94 等に比定される）であるから，仮に「天街」に由来するとしても，古代日本人が，実際の天空上に「天街（天の八衢)」を比定した時は，「天街」の本来の位置ではなく，昴を「天街」と見なした，あるいは誤認したとも取れるのである．いずれにしても，昴も「天街」も牡牛座の一部で近接しており，そこに，天の出入口があるという考えが存在したことは興味深い事実である(注4)．その場合，昴も「天街」も畢星たる猨田毘古神には，極めて近い位置にあるから，猨田毘古神が「天の八衢に居て」という記述には，どちらでも良く適合している．ただ，中国の「天街」と日本神話の「天の八衢」が本当に関連があるかどうかは，今後さらに検討すべき課題であるので，本稿では，従来通りに，「天の八衢」は「昴」を見た古代日本人が，星の群れを天の出入口が多数集まった所と見なしたものと判断しておきたい[4]．

(注1)　国立天文台の談話会でも，星団であればプレセペ星団も考えられるのでないかという御指摘を受けたが，日本の文学や方言・民俗で，プレセペ星団は，ほとんど全くと言って良いほど登場しない星団なので，日本人が関心を持った可能性は小さいと思われる．

(注2)　七咫・七尺の長さは，藤田元春『尺度綜考』，藪田嘉一郎『中国古尺集説』等に拠る推測値である．

(注3)　長谷川一郎氏は，かつて，本稿の基になった『古事記年報』27号・28号の記事について，猨田毘古神の眼は，一つはアルデバランとしても，それでは赤い眼が一つだけだから，火星がもう一つの眼になるのではないかと指摘された．(『天界』747号)．確かに，そうであれば，両眼とも赤い眼になって，日本書紀の記述とは一致の度合いは高まる．しかし，藤井旭氏も，火星が近接する写真を撮って下さったが，火星とヒアデス星団とは完全には重ならず，また，惑星を含めた星座というものは，他に例がないようなのが，気にかかる点である．

(注4)　牡牛座の位置に古くは春分点があった訳だから，牡牛座に天の出入口があるとされるのは，あるいは，そうした古い時代の記憶の残滓かもしれないと思われる．

参　考　文　献

1）渡辺敏夫，1953，天界 343

2）勝俣　隆，1986，「猨田毘古神の解釈について」古事記年報　28，114～135
勝俣　隆，1989，「日本神話の星（下)」，星の手帖 44，82～86
勝俣　隆，1994，「日本書紀の猨田彦神の記述に関する一考察」，長崎大学教育学部人文科学研究報告 48，1～15

3）大崎正次，1987，中国の星座の歴史（雄山閣）

4）勝俣　隆，1985，「天の八衢の解釈について」古事記年報　27，61～75
勝俣　隆，1989，「日本神話の星（上)」，星の手帖 43，94～96